

久しぶりの失敗に気を引き締められました

目を見張る新型サブソイラ

5月も後半に入ると、薫風が大地を駆け抜けていきます。春真っ盛りともいえる深浦の農場を、大型の農業機械が走り回っています。小麦畑は緑を増していますが、それ以外の大地は、冬の眠りから覚めるように、トラクタによって出来秋の裏り豊かな土壌につくりかえられているのです。今年、深耕用にアキユーム式のサブソイラをテストしたところ、その威力の素晴らしさに惚れ惚れしています。北海道のスガノ農機製で、250馬力のクローラトラクタでけん引していますが、能率がよく、土も非常に膨軟となり、しかも故障がないのです。アキユーム式というのは、石に触れると衝撃を察知しその石を避ける機構です。その作動風景はまるでピアノの鍵盤みたいに反応するので、私はアキユーム式というよりは、ピアノ式がピタリと表現だという気がしているほどです。

今までのサブソイラは石で破損することが多く、その度に作業がストップしていました。このアキユーム式サブソイラは、破損することがまったくありません。これまで60haを深耕し、秋までにはもう100haぐらいをこなしそうです。

このサブソイラの作動をみると、土が下から盛り上がり、横に広がるのですが、大地を本当に起こしているという感じで、圧巻的な作業風景です。これからはプラウ耕が不要になるかも知れません。それほど、革新的な機械です。

このアキユーム式サブソイラで深耕した土壌に、初めて植え付けたのがバレイシヨです。例年

になく早い3月31日に植え付けが始まり、ゴールデンウィーク明けに終わりました。ポテトプランタ3台での植え付けですが、加工用と種子用の2種類で約80haもの面積ですから、植え付け期間がこんなに長くなるのです。

収穫までに3回行う土寄せの第1回目、早くも5月14日から行われています。土寄せは、雑草防除や、倒伏防止、病原菌の感染防止のほか、地温を高めてイモの肥大を促進させるなど一石数鳥の効果を生み出す作業です。カルチベータで瞬間に終えています。

今年、九州方面で大口の新規需要者がみつかり、担当する農場代表の佐々木は力が入っています。私が担当するダイコンは5月10日から種蒔きをはじめました。この時期に蒔くのは、さしみのツマ用とスーパーの青果用として収穫するものです。7月中旬頃から順次出荷していくつもりです。真夏の出荷は昨年新設した集出荷施設で予冷するつもりです。この予冷は風圧予冷といわれるもので、よくある差圧予冷や、真空予冷とは異なり、冷たい風を送る方式で、25度のを12時間で3度に冷やすという能書きです。今年初めての運転になるので、今から楽しみです。

失敗を糧に

ダイコンの主体となる加工用は7月下旬から種蒔きに入ります。その加工用で、今冬、ミスをしました。新たに購入した加工場のタンクで一次貯蔵したのですが、重石をとったところ、何と丸いはずのダイコンがペチャンコになってしまっていたのです。商品価値がかなり下がります。

原因は石が重すぎたせいです。完全な計算ミスでした。20年前に加工に取り組み始めたころは、よく失敗はありましたが、こんなことは久しぶりです。慣れがあったかもしれません。「初心忘れるべからず」「油断大敵」「勝つて鬼の緒を締めよ」、こうした格言を肝に銘じてダイコンづくりには励まなければと、心新たにしているところです。

前号でも書きましたが、無農薬ダイコンの売れ行きが好調です。このため、取引会社から高価格で独占的に取り扱いたいという話があったこともありました。しかしながら、加工メーカーとは長いつきあいをしていかなければならないことを考えると、一時的にいい思いをする経営は邪道という気がしており、こうした話は断るようになっています。

農業経営というものは、常に永続性を念頭におきながら当座のさまざまな問題を克服していかなければならないのです。

国産の要望が多い大豆は、前年並の45haほどを作付けする予定です。5月13日から植え付けしています。

青森県は今年、東北112号という品種を奨励品種に採用しました。豊産性で品質も良いと聞いているので、期待できそうな品種です。その実証圃の設置を県から頼まれました。採種面積がまだ少なく、種子が十分確保されていないため、わずか30aの面積でしか栽培できませんが、地元の農業改良普及センターの指導のもと、高収量、高品質のものを生産するべく、腕によりをかけて栽培管理することになっています。

バレイシヨ、ダイコン、大豆などは今春植え付けしていますが、そうした中であって昨秋蒔いた小麦の緑が鮮やかです。約180haの作付面積ですが、例年、越冬後にみられる雪腐れ病がほとんどみられず、ウドンコ病などほかの病害虫も極め

上：クローラトラクタにけん引されてのアキューム式サブソイラの作業
下：広大な農地での大豆の播種作業



若者を農業へ呼ぼう

前号で、大卒の新規就農者が一気に三人誕生すると書きましたが、一人リタイアし、今二人が農場の仲間入りしています。

明治大学の理工学部という農業とは異色の学部を終えてやってきた中雄一臣(23)は、深浦町のふるびた軒家を借りて自炊生活をしており、張り切ってトラクターを乗り回しています。彼は福島県出身ですが、間借り家の隣近所の人達から魚などの差し入れもあって、この青森の西はずれの地深浦町が徐々に気に入っているようです。

この中雄のように、農業にも若い力がどんどん入ってくる必要があります。医者になる人材よりも、新卒で農業に就く人材が少なくなっているという時代ではありますが、若者を農業に呼び寄せられるのも我々経営者の果たすべき大きな仕事であると考えています。

「農場の後継者は自分たちの子供でなくてもいい。やる気があって農業が好きなら若者であれば、誰にでも門戸を開いておく」というのが、黄金崎農場のモットーです。そのためには、広い大地で大型機械を駆使して、需要者が望む農産物を生産、提供するという、魅力ある農業経営を実践してみせることだと思っています。

「言うは易く、行方は難し」ですが、とにかくにも、若者を惹き付けられる農場でありたいと、我々はがんばっているつもりです。

そして、農業の三要素である「資本」「経営」「技術」が、それぞれ異なった人に継がれてもいいという、弾力性もあわせもっているつもりです。後継ぎがないと悩んでいる地域や経営者が多いようですが、まず経営者がしっかりした青写真を描かなければ、人材の確保は難しいような気がし

ますが、いかがでしょうか。

私事になりますが、この春就農した長男は、妻や私の父母とともに、実家でリンゴづくりを頑張っています。私は仲間とともに黄金崎農場を経営しているため、実家の手伝いはなかなかできないのですが、それでも息子がリンゴでがんばるといふことなので、昨年、思い切って1・8haのリンゴ園の若返りを図り、息子の将来に備えました。この若返りは、国がガット・ウルグアイラウンド対策で講じているリンゴの改植事業によるもので、国や県、市町村の高率助成のため自己負担がわずか20%で済むという、有利なものです。

農業が国という枠組みに縛られているのは、間違いなく、それだけに我々は国への注文が多いのは事実ですが、国も支援措置は講じているのです。これをうまく活用していくことも、農業経営者にとっては、大事なことです。黄金崎農場も発足以来、制度資金や補助事業など、多くの国の施策を活用して今日に至っているのです。

食料自給率が五割を切って、国家の存立にいいはずがありません。さまざまな議論の中で、国は農業を何とかしたいと思っているはずですが、そうした国の施策を自らの発想でもって巧みに生かしていくことも、これからの農業者にとって大切なことのように思っています。それは、何も我々生産サイドだけのためでなく消費者にとっても大事なことになるはずだと思われからです。



きむら・しんいち／1950年9月生まれ。青森県立五所川原農林高校卒業。4Hクラブの仲間の佐々木君夫、竹内雅孝とともに「大規模で、企業的で、給料をもらおう」農場を夢見て、76年農事組合法人黄金崎農場を設立

て少ない状況です。
春先の生育ぶりは、農場開設以来、一、二を争うような出来栄で、担当する竹内雅孝の目は輝いています。生育が良すぎて倒伏が心配だということ、生育抑制のために春にも麦踏みをしたほどです。ただ、小麦は油断なりません。特に収穫期に降雨が続くと、穂発芽し商品価値がゼロになってしまうのです。心配ごとが絶え間無く続くのは、天候相手の農業という産業の宿命かもしれません。

今年、南部小麦を何とかして、生産してほしいと頼まれて作付けしました。この品種、県の奨励品種から外されて15年以上経つのでどうかかと思いましたが、アミロース含量が高くてうどんに適するからという実需者のたつての希望に添えたいと思い、導入に踏み切ったものです。消費者あつての農業ですから、こうした対応も当然のことでしょう。